

第1章 歴史的環境

斑鳩の位置 奈良県生駒郡斑鳩町は奈良盆地北西部の矢田丘陵南端に位置する。飛鳥から難波へ至る経路上に位置する歴史上重要な地域であった。斑鳩町には現存しないものも含めると、約70基の古墳が存在する（図1、前園編1990）。斑鳩大塚古墳の発掘調査成果を報告する前に、町内で調査が行われた主要な古墳についてその概要を述べたい。

前期古墳 斑鳩町内で最古の古墳と考えられているものは駒塚古墳（2）である。法隆寺の東に位置し、主軸をほぼ南北にとる前方後円墳である。2000～2002年度に行われた調査により、全長が49m以上、後円部径が34mとされている。葺石をもつが、埴輪の出土は少量であるため、墳頂部のみに配置されていた可能性が高い。二重口縁壺の存在から、4世紀後半頃の築造とされる。周濠は確認されていない。後円部墳頂部で墓壇掘形が確認された。規模は東西約6m、南北9.4mで、南北に主軸を持つ隅丸方形と推定される（荒木2007、2011）。

中期古墳 調子丸古墳（3）は駒塚古墳の南約100mに位置する円墳である。墳丘規模は古墳の裾が大きく削られているために明確にできないが、現存径は約14mである。2002年度の発掘調査により、周濠と見られる溝が発見され、30m級の円墳と考えられる（平田2011）。

瓦塚古墳群（4）は大和郡山市との境界付近に位置する前方後円墳2基、円墳1基で構成される古墳群である。1975年の調査により、1号墳は全長約97mの前方後円墳、2号墳は全長約95mの前方後円墳、3号墳は直径約30mの円墳と報告された。1・2号墳から出土した埴輪から、中期古墳と推定される（関川編1976）。

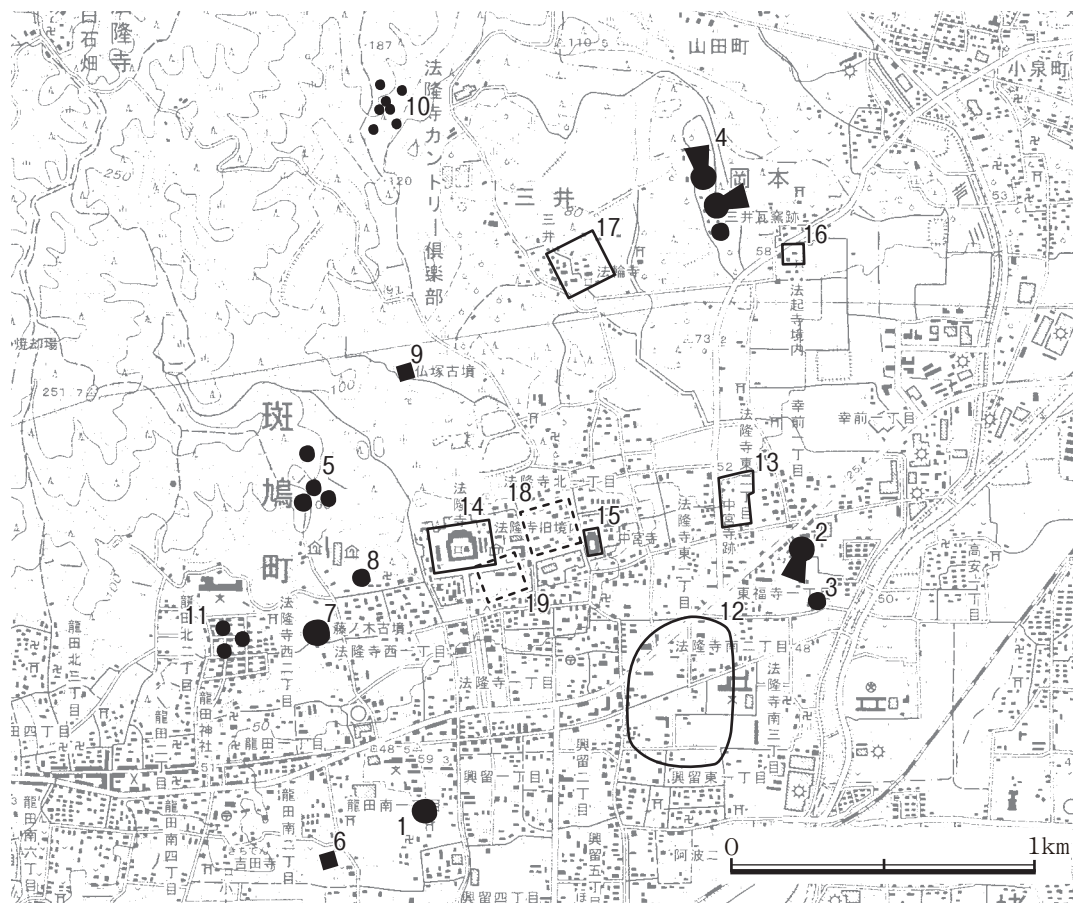
戸垣山古墳（6）は1974年に行われた測量調査により、一辺約20mの方墳とされている（中井1975）。2011年の立会調査の際、中期後半の埴輪片が出土した（荒木2014）。

藤ノ木古墳北方に位置する寺山古墳群（5）も古相の群集墳の可能性もある。4基の古墳で構成され、2014・2015年に奈良大学が測量調査を行った。1号墳は直径約23mの円墳か全長約30mの前方後円墳、2号墳は長径約20mの円墳である可能性が高い（河村・高左右・豊島2015）。

後期古墳 後期古墳では、まず藤ノ木古墳（7）があげられる。1985年以来、第6次に及ぶ調査が行われた。直径50m以上の円墳で、南東部に開口する全長約14mの横穴式石室を有し、石室内からは未盗掘の家形石棺が確認された。出土した武器、武具、馬具は古墳時代の金工技術や国際交流を物語る資料である（勝部ほか編1990、前園ほか編1995、平田2008）。

藤ノ木古墳の北東には春日古墳（8）が存在する。墳丘裾部は削られており正確な規模は明らかではないが、直径30m以上の円墳とされる。また、横穴式石室の一部とみられる石材が露出している（平田2013）。法隆寺北方に位置する仏塚古墳（9）は一辺約23mで、横穴式石室が開口する。石室内からは陶棺片や金環、刀子、須恵器、土師器などが出土した。石室内からは仏具や仏像なども出土しており、中世には石室を堂として再利用したと考えられる（河上・関川1977）。

三井古墳群（10）は瓦塚古墳群の背後の丘陵に所在する古墳群である。分布調査で9基の古墳



国土地理院発行 2万5千分の1 地形図「信貴山」を使用

- 1 斑鳩大塚古墳 2 駒塚古墳 3 調子丸古墳 4 瓦塚古墳群 5 寺山古墳群 6 戸垣山古墳
7 藤ノ木古墳 8 春日古墳 9 仏塚古墳 10 三井古墳群 11 御坊山古墳群 12 酒ノ免遺跡
13 中宮寺跡 14 法隆寺西院 15 法隆寺東院 16 法起寺 17 法輪寺 18 斑鳩宮跡
19 法隆寺若草伽藍跡

図1 斑鳩大塚古墳周辺の遺跡分布図 1 : 25,000

が確認された。多くの古墳が消滅したが、残る古墳の大半は直径10～15m前後の円墳と考えられ、埋葬施設の大半は横穴式石室と推定される（久野・関川1976、関川1990）。

終末期古墳 竜田御坊山古墳群（11）は、藤ノ木古墳の西約250mに存在する3基の古墳群である。3号墳は径8mを越す円墳と考えられる。埋葬施設は横口式石槨で、黒漆塗りの陶棺が安置されていた。棺内からは若年男性とみられる人骨と共に、琥珀製枕など、他に類を見ない副葬品が出土した。被葬者は上宮王家の一員と想定されている（泉森編1977）。1・2号墳の墳丘形態や規模は不明だが、埋葬施設が判明している。1号墳は高さ1m、長さ2m、幅1.7m程度の竪穴式石室状のものと考えられ、人骨3体分が発見された。石室内からは環座金具や鉄釘が発見されている。2号墳は横穴式石室をもつ古墳であるが、石室規模は明らかにされていない。家形石棺の蓋石が発見された。

以上、調査によって内容が判明しているものを中心に斑鳩の古墳を概観した。斑鳩には多くの古墳が存在するだけでなく、法隆寺や中宮寺などの古代寺院も多く展開する。これにより斑鳩が、古墳時代から古代にかけて重要な地域であったといえる。（岡 紗佑里）

第2章 調査の経緯と経過

1 過去の調査

斑鳩大塚古墳については、古くは『大和国古墳墓取調書』に記載があるが（秋山編1985）、本格的な調査は1954年の忠霊塔建設工事に伴うものが最初である。調査では埋葬施設である粘土槨が検出され、銅鏡、筒形銅器、石釧など副葬品の一部が出土した。また、当時の理解では直径約35m、高さ約4mの円墳で、円筒埴輪列、葺石の存在は確認されたが、周濠は持たないとされていた（北野1958）。

しかし、その後は発掘調査は行われず、古墳を今後も保存・活用するために詳細な情報を把握する必要があった。2013年8月19日から9月3日にかけて測量調査を行い、さらに11月に地中レーダー探査を行った。その結果、本古墳が周濠を伴う前方後円墳である可能性が浮上したため、前方部と周濠の存在を確認する必要が生じた。そこで、2014年3月から1ヶ月間、斑鳩町教育委員会が主体となり、奈良大学文化財学科の協力で古墳周辺の発掘調査を行った。3ヶ所の調査区を設定した結果、第1調査区では幅約8mの周濠を確認できたが、第2、第3調査区では前方部や周濠の痕跡を確認できなかった。（土屋博史）

2 調査の経過

調査の経過 前年度の成果をふまえ、前方部の確認を最重要の課題として2015年度の調査を計画した。調査区は前方部と推定される墳丘東側の耕作地とその北側に設定し、さらに、墳丘南側の周濠を確認するための調査区も加えた。

今回の調査は斑鳩町教育委員会と奈良大学文化財学科が共同で行った。調査期間は休日と雨天を除く2015年3月2日から4月12日までの計30日間で、経過は以下の通りである。

- 3月2日 各調査区を設定。掘削作業開始。
- 3月6日 第4調査区で周濠埋土らしき土層を確認。
- 3月13日 第6調査区を南に3m拡張。新たに墳丘南東に第7調査区を設定。
- 3月16日 第6調査区拡張区で墳丘の裾部分を検出。第7調査区で周濠を検出。
- 3月17日 第4、第5調査区を完掘。写真撮影。
- 3月18日 第4調査区の写真撮影。第6調査区の拡張区をさらに東へ1m拡張。
- 3月21日 第6調査区の東拡張区でくびれ部付近の墳丘を確認。
- 3月23日 第6、第7調査区を完掘。写真撮影。
- 3月29日 現地説明会を行う。
- 3月31日 埋戻し作業開始。
- 4月12日 埋戻し作業および撤収作業を行い、全行程完了。



1. 発掘開始



2. 第5調査区の発掘風景



3. 土師器の検出状況



4. 遺物洗浄作業



5. 記者発表



6. 平面図作成の様子



7. 現地説明会



8. 埋戻し作業

図2 調査の様子

遺物整理と報告書作成 発掘調査の終了後、2015年4月から翌年3月にかけて、奈良大学文学部文化財学科で遺物整理および報告書作成を行った。なお、今回出土した遺物の一部は、斑鳩文化財センター速報展『斑鳩の文化財展－平成26年度実施の調査成果展』にて、2015年7月23日から8月11日まで公開した。

発掘調査・遺物整理作業参加者 今回の発掘調査および遺物整理作業の参加者は以下の通りである（括弧内の学年は2015年3月当時）。

豊島直博（奈良大学文学部准教授）、荒木浩司（斑鳩町教育委員会）、桂 大介、河村萬里、高左右 裕、堤 千畝、仁木 理、長谷川 愛、渡辺ゆきの（以上、大学院修士1回生）、岡 紗佑里、小堀 僚、間所克仁、山内菖平（以上、文学部4回生）、岩永祐貴、上田有美、梅木梨沙、尾崎綾亮、柴田拓也、土屋博史、三好愛美、和田健嗣、和田直己（以上、文学部3回生）、青木卓哉、青木祐希、伊田 葵、大高厚志、鈴木綾香、清尾美喜、宗圓政輝、塚崎 創、中岡呉葉、中谷光里、早川明優加、古林舞香、松森多恵、南 貴匡、柳澤 楓、山崎利紗、山崎結似（以上文学部2回生）、泉 眞奈、磯橋祐実、伊藤彩花、今村早香、太田喬士、川尻 大、岸本真祐子、田口裕貴、花木大地、樋口安奈、廣瀬史弥、福永皓平、古山朋広、松澤健太、丸山悠里香、森田愛理、山崎康平、若林 繁（以上文学部1回生）、伊東 豊（通信教育部学生）、田村彩香（神戸市立外国語大学1回生）、内田 徹（奈良大学附属高校生）、内田 敬（奈良大学附属高校父兄）。（土屋）

第3章 発掘調査の成果

1 調査区の配置

前章で述べたとおり、昨年度の調査では墳形と範囲確認を目的に、残存する墳丘の北側と北東側に3カ所の調査区を設けた。墳丘北側の第1調査区では周濠を確認したが、墳丘北東側の第2・第3調査区では前方部の墳丘や周濠は確認できなかった。

そこで今年度の調査では、現存する墳丘の北側に第4調査区、北東側に第5調査区、東側に第6調査区、南側に第7調査区を設定し、前方部と周濠の確認を目指した(図3)。以下、各調査区の成果について述べていきたい。(間所克仁)

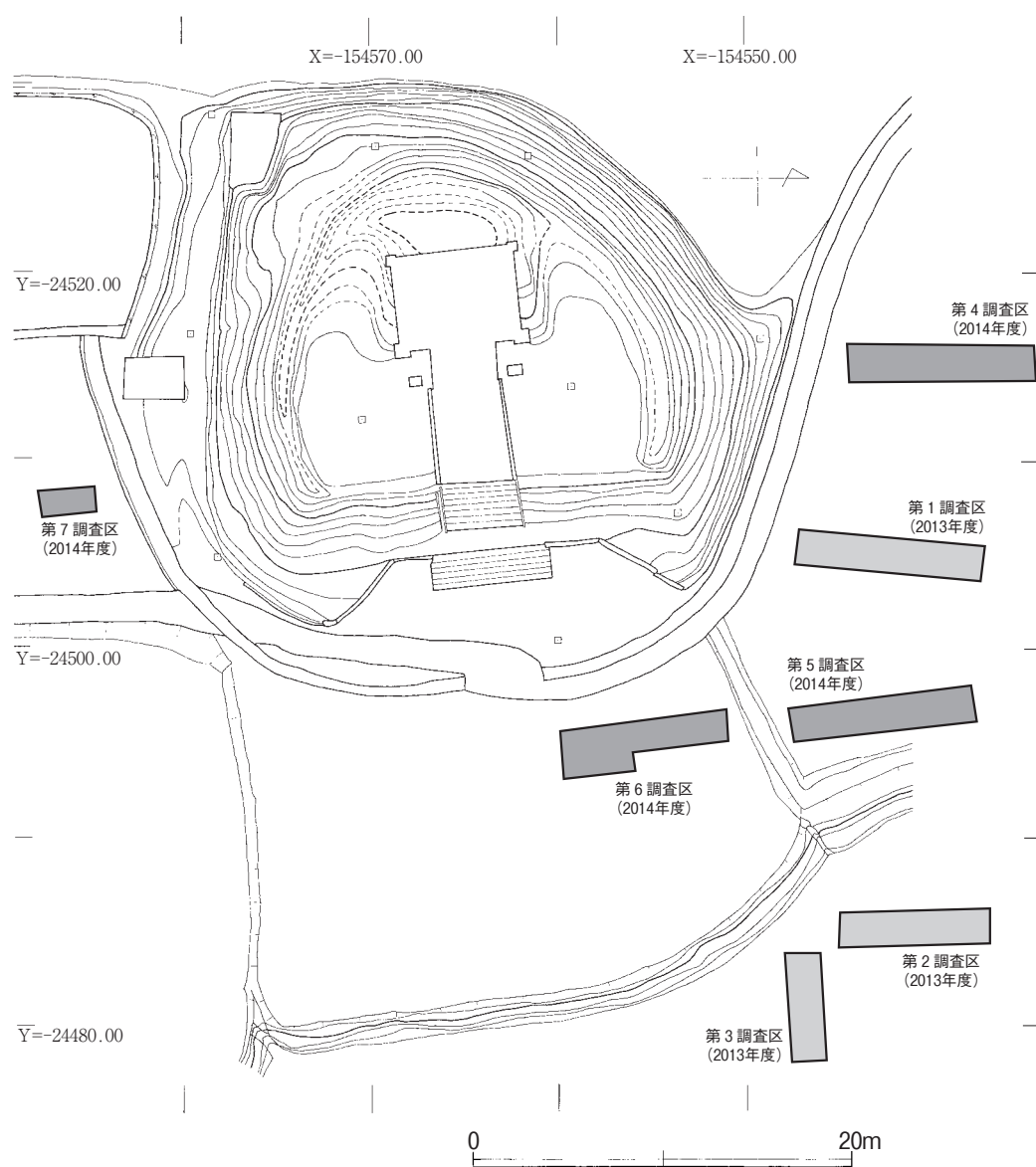


図3 調査区配置図 1:400

2 第4調査区（図4、図版1、2）

位置と目的 第4調査区は地中レーダー探査の結果と、2014年度の調査結果から推定される周濠の確認を目的とした調査区である。調査位置は、現在する墳丘の北側、第1調査区の西側で、南北10m、東西2mの規模で設定した。調査面積は20㎡である。

基本層序 基本層序は上から順に、表土である暗灰色砂質土（厚さ約30cm）、近世以降の耕作土である灰褐色砂質土（厚さ約40cm）、古代以降の遺物包含層である暗灰褐色砂質土（厚さ約20cm）となり、地山である黄褐色粘土に至る。地山上面の標高は約46.1mである。

検出遺構 古墳の周濠と考えられる溝SD01、古代以降の柱穴と溝1条、近世以降の耕作溝を検出した。

SD01は地山上面で、調査区の南端から約6mにわたって検出した。深さは約60cmである。埋土は上層が茶褐色砂質土、下層がしまりの良い灰色砂質土である。今回の調査では溝全体を下層まで掘削せず、調査区西側の排水溝部分のみを掘り下げて底を確認した。溝は南から北に向かって次第に浅くなり、北端で急斜面となる。第1調査区で検出したSD01の続きに相当し、周濠が西に続くことが判明した。地中レーダー探査の成果によれば、溝はさらに西へ続き、墳丘を巡ると考えられる。SD01の埋土からは埴輪や土器などの遺物が多数出土したほか、管玉1点が出土した。埴輪は周濠埋土の上層にあたる茶褐色砂質土から多く出土した。その多くが円筒埴輪の破片である。調査区の南壁では、標高45.6m付近で葺石と思われる転落石を複数検出した。

古代以降の遺構では、柱穴と東西溝を検出した。柱穴には掘形と抜取穴を区別できるものも含まれ、根石が残存するものもあった。柱穴は、その規模から柵や建物と考えられるが、規模や主軸は確定できなかった。これらの柱穴は第1調査区のものの一連と考えられる。東西溝SD02は、SD01の上面で検出した。検出面で幅2.1m、最深部の深さ0.5mを測る。埋土から飛鳥時代末頃の土師器坏1点（図11-1）が出土した。

以上のように、第4調査区では古墳の周濠、古代以降の柱穴と溝を確認した。周濠は断面逆台形状を呈し、外側には葺石などは認められない。また、柱穴の一部は周濠の埋土と重複する。こうした所見は第1調査区の調査成果と共通する。周濠の埋没年代は出土した須恵器等から7世紀前葉頃とみられる。（河村萬里）

3 第5調査区（図5、図版3、4）

位置と目的 第5調査区は前方部に伴う周濠の有無を確認するため、現存する墳丘の北東に設定した調査区である。調査区は南北10m、東西2mで、面積は20㎡である。

基本層序 基本層序は上から順に、表土である黒褐色砂質土（厚さ約25cm）、近世以降の耕作土である灰褐色砂質土（厚さ約40cm）、古代～中世の遺物包含層である灰茶褐色砂質土（厚さ約20cm）となり、地山である明黄灰色粘質土に至る。地山上面の標高は約45.9mである。

検出遺構 第5調査区では、古墳の周濠と考えられる溝SD01の続き、古代以降の柱穴4基と

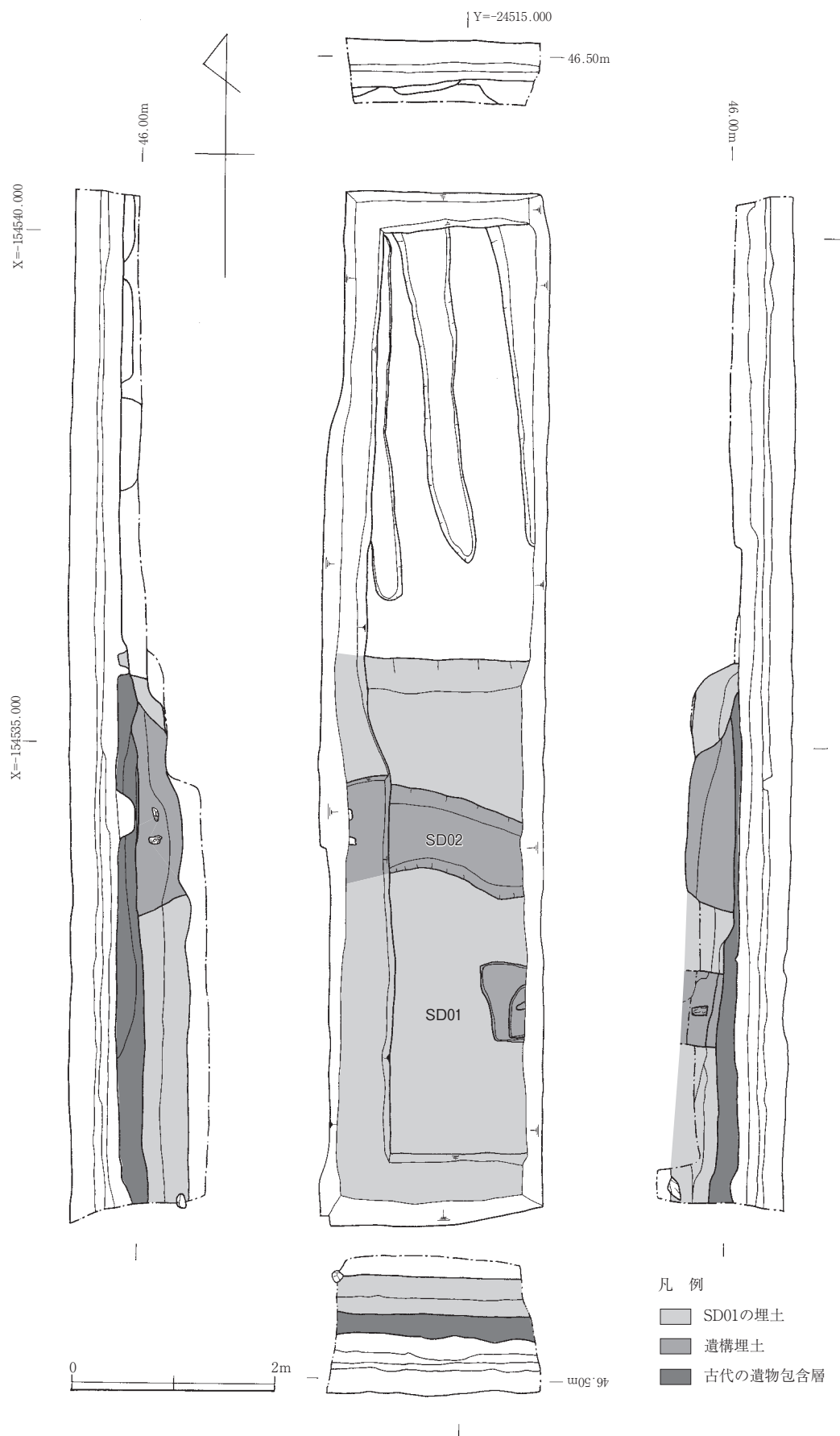


図4 第4調査区平面図・断面図 1:60

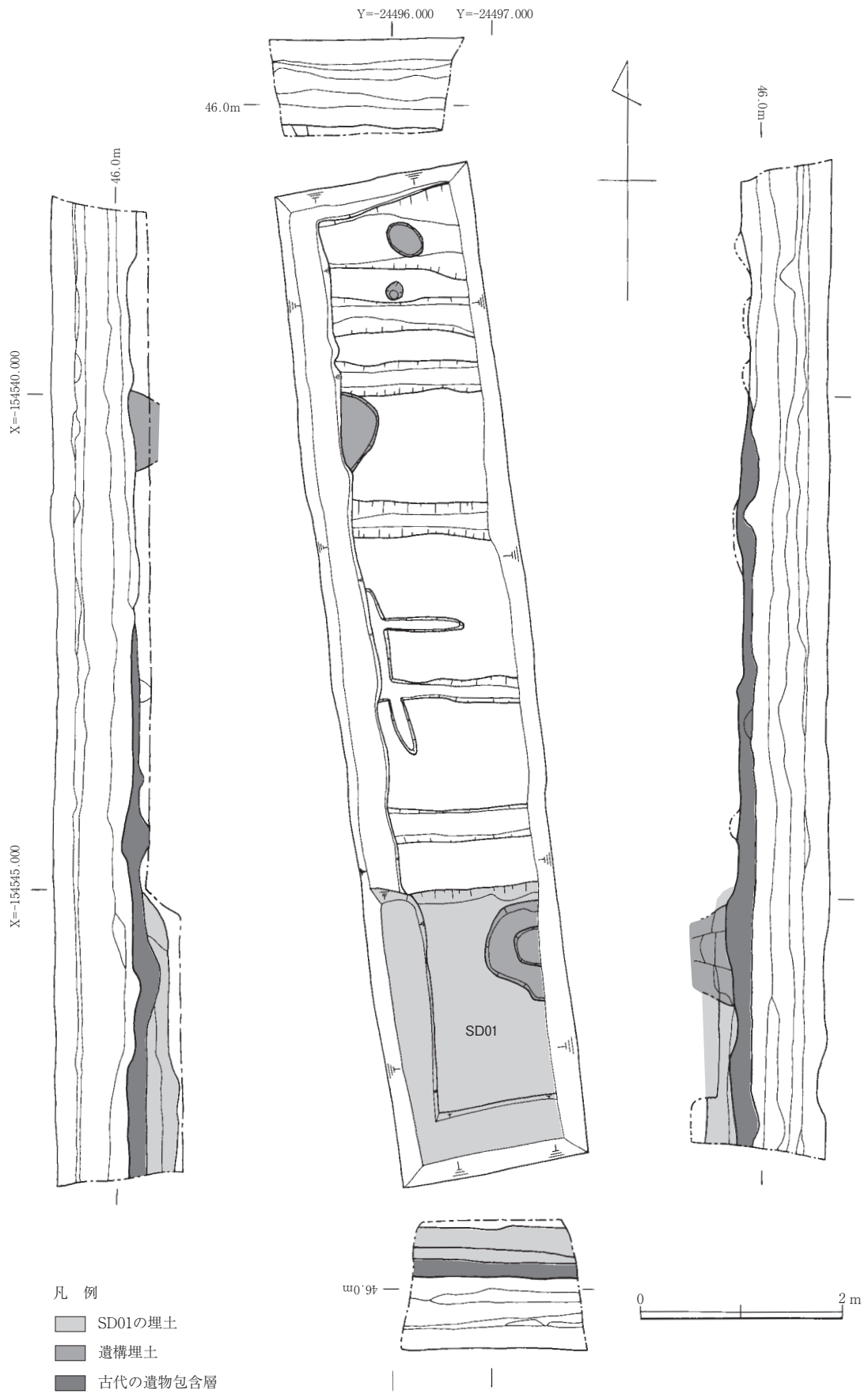


図5 第5調査区平面図・断面図 1:60

素掘り溝、近世以降の耕作溝を検出した。

溝SD01は地山上面で、調査区の南端から約3mにわたって検出した。最深部の深さは約30cmである。埋土は、上層が黄灰色砂質土、中層が黄褐色砂質土、下層が灰色粗砂である。第4調査区と同様、溝全体を完掘せず、調査区西側の排水溝部分で溝の底を確認した。溝は南から北に向けて次第に浅くなり、北端では急斜面となる。こうした様相は第1調査区、第4調査区のSD01と共通することから、すべて一連と考えられる。第5調査区では、SD01は現存する墳丘を円形に巡らず、直線的に東へ延びることが判明したため、前方部の存在を示唆することとなった。SD01の埋土からは、埴輪や土器が出土した。

古代以降の遺構では、柱穴と東西溝を検出した。柱穴の1つは堀形と抜取穴を区別できる大型のものである。溝はいずれも幅約20cmと細く、近世以降の耕作溝と考えられる。（岩永祐貴）

4 第6調査区（図6、図版5～7）

位置と目的 第6調査区は、現存する墳丘の東に、前方部の有無を確認することを目的として設定した。設定当初は南北6m、東西1.5mであったが、この規模では前方部の有無の確定に至らなかったため、南と東に調査区の拡張を重ね、最終的な調査面積は19㎡となった。

基本層序 基本層序は上から、表土である黒褐色砂質土（厚さ約20cm）、近世以降の耕作土である灰褐色砂質土（厚さ約40cm）、古代～中世の遺物包含層である暗茶褐色砂質土（厚さ約20～30cm）となり、青灰色粘質土の地山に至る。地山上面の標高は約45.8mであった。

検出遺構 検出された遺構として古墳の墳丘、周濠と考えられる溝、柱穴、近世以降の耕作溝などがある。墳丘は調査区の南端から約3.8mの範囲で検出した。墳丘盛土の上面は、近世以降の耕作によって削平されていた。墳丘の最も高い部分の標高は約45.9mであった。

墳丘の上端は調査区南端から約2.5mのところで屈曲し、この部分がくびれ部と考えられる。くびれ部より西が後円部、東が前方部である。後円部の下部は地山を削り出して成形されている。また、前方部は拡張区東端のサブトレンチで部分的に確認したところ、盛土によって構築されていることが判明した。墳丘上面からは葺石の転落石、円筒埴輪、形象埴輪が出土した。

溝SD01は調査区の北端から約7mにわたって確認した。最深部の深さは約40cmである。埋土は上層が暗灰褐色砂質土、中層が暗橙褐色砂質土、下層が橙褐色粘性砂質土である。調査区の北端から南に向かってゆるやかに浅くなり、約5.9mで墳丘に向かって立ち上がる。さらに、前方部に沿って東へ続く。昨年度の第1調査区で検出した溝、第5調査区で検出した溝とつながり、古墳を巡る周濠と考えられる。第5調査区で確認した部分も合わせると、くびれ部付近の周濠の幅は約12mとなる。今回の調査では他の調査区と同様、周濠の完掘はせず、調査区西側の排水溝部分で深さを確認した。埋土からは円筒埴輪をはじめとする多数の遺物が出土した。

以上、第6調査区では墳丘と周濠を確認した。最大の成果は、斑鳩大塚古墳が円墳ではなく、前方部をもつと判明したことである。今後の調査によって、前方部の規模、くびれ部の幅などを確定させる必要がある。（尾崎綾亮）

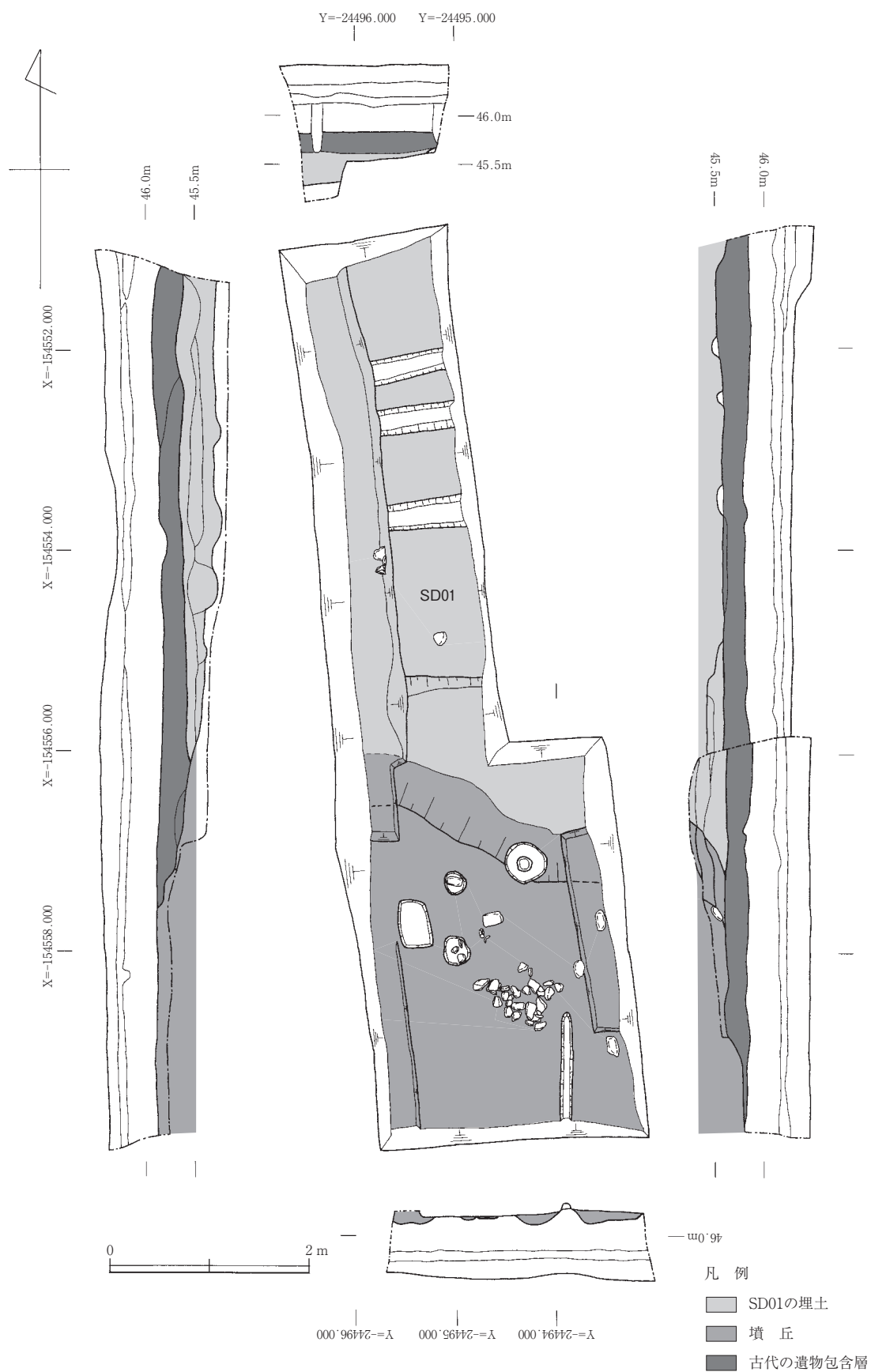


図6 第6調査区平面図・断面図 1:60

5 第7調査区（図7、図版8）

位置と目的 第7調査区は墳丘南側の周濠の確認を目的として、現存する墳丘の南に設置した調査区である。周辺は耕作地で、畑に囲まれた位置に調査区を設定したため、南北3.3m、東西1.5m、面積約5㎡の小規模な調査区となった。

基本層序 基本層序は上から順に、表土である黒褐色砂質土（厚さ約25cm）、近世以降の耕作土である灰褐色砂質土（厚さ約30cm）、地山である暗黄灰色粘質土である。地山上面の標高は約46.0mであった。

検出遺構 検出された遺構に溝SD01がある。土層を検討した結果、調査区全体が溝SD01に含まれることが判明した。埋土

は上層が茶褐色砂質土、中層が黄灰色粘質土、下層が灰色砂質土である。SD01の南半部は平坦だが、調査区の北側約1mの位置から急激に深くなる。溝の深さは平坦面で約0.2mを測る。北側は湧水のため底を確認できず、現状で約0.6mであった。SD01からは埴輪や須恵器がわずかに出土したが、中世以降の遺物は出土しなかったことから、古墳に伴う周濠と判断した。

この他、周濠埋土上面で南北方向の素掘り溝を1条検出した。幅は15cm～20cm、埋土は明灰褐色砂質土で、近世以降の耕作溝と考えられる。

（古林舞香）

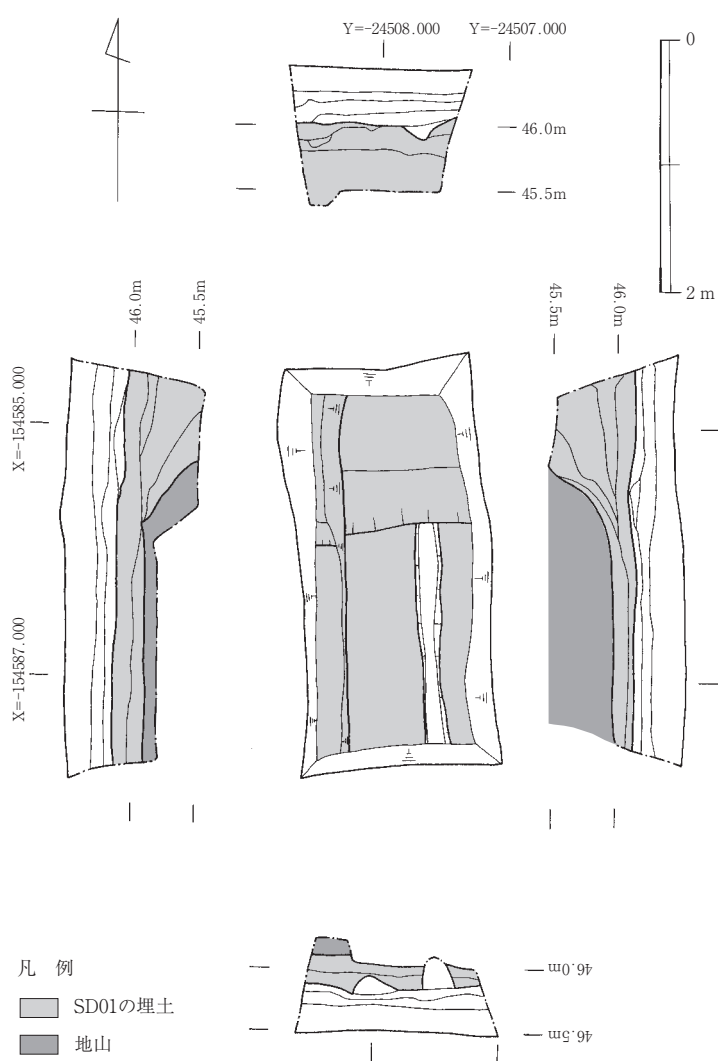


図7 第7調査区平面図・断面図 1:60

第4章 出土遺物

1 出土遺物の種類と量

今回の発掘調査では4つの調査区から整理箱12箱分の遺物が出土した。調査区別にみると、第4調査区ではほぼ完形の土師器坏が1点出土したほか、土器や埴輪片が出土した。第5調査区では埴輪片、須恵器、土師器が出土したが、全体の量は少ない。第6調査区では形象埴輪と円筒埴輪が多数出土し、遺物の量が最も多かった。第7調査区は面積も狭いため、埴輪片や土器片が数点出土したのみである。

出土遺物の内訳は埴輪が5箱、古墳時代～古代の土師器3箱、須恵器2箱、中世以降の土器1箱、その他の遺物1箱である。その他の遺物とは瓦のほか、管玉、土錘、中世の石臼の破片、鉄器が各1点である。

(田中香里)

2 円筒埴輪 (図8・9、図版9・10)

今回の調査では第4・6調査区を中心に多数の円筒埴輪が出土した。完形に復元されるものはないが、回転復元が可能なもの、透孔の形やハケ等の調整を観察できる資料が多く含まれる。以下、おもな個体について報告する。

円筒埴輪 1～3は円筒埴輪の口縁部の破片で、全て貼付口縁である。1の口径は28.8cmに復元される。厚めの突帯を貼り付けたもので、突帯下端には強い横ナデが施されている。2の口径は24.2cmに復元される。幅広の突帯を貼り付ける。断面観察により、接合方法は内傾接合である。3は突帯まで横ハケを施すもので、横ハケの後に突帯中央部と下端に横ナデが施されている。横ハケは内外面ともに施されているが、静止痕は観察できない。

7～10は円筒埴輪の胴部である。7の胴部径は20cmに復元される。円形透孔の一部が残存する。内外面ともに二次調整の横ハケを施すが、静止痕は観察できない。8の胴部径は20.6cmに復元される。円形透孔の一部が残存する。外面は摩滅しており、わずかに二次調整の横ハケが観察できる。内面には粘土紐の接合痕が観察でき、接合方法は内傾接合である。9の胴部径は18.0cmに復元される。内面に縦ハケが施されており、静止痕が観察できる。また、ハケ目原体の幅が3cm程度と推定できる。10の胴部径は20.6cmに復元される。円形透孔の一部が残存する。突帯が剥離しており、外面の調整技法は摩滅により不明である。内面には不定方向のナデが施されている。

11は底部の破片である。底部径は21cmに復元される。やや内湾した直後、わずかに外傾して立ち上がる。外面は摩滅し、調整は不明である。内面の底面付近にユビオサエが認められる。

12と13は胴部の破片である。12は外面に一次調整の縦ハケと二次調整の横ハケが施されている。横ハケにはかろうじて静止痕が認識でき、A種横ハケからB種横ハケへの過渡期に当たる資料と

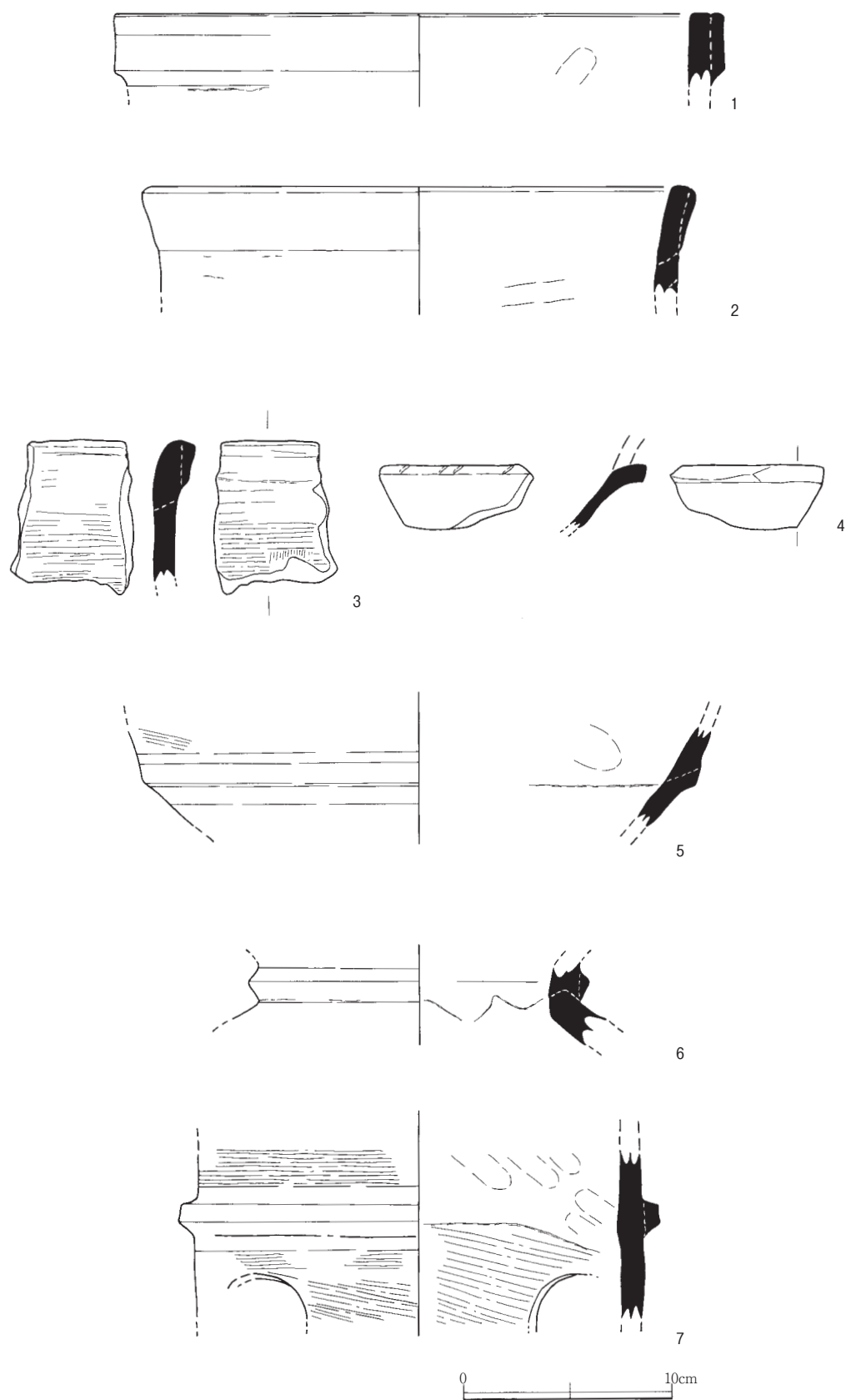


図8 円筒埴輪実測図1 1 : 3

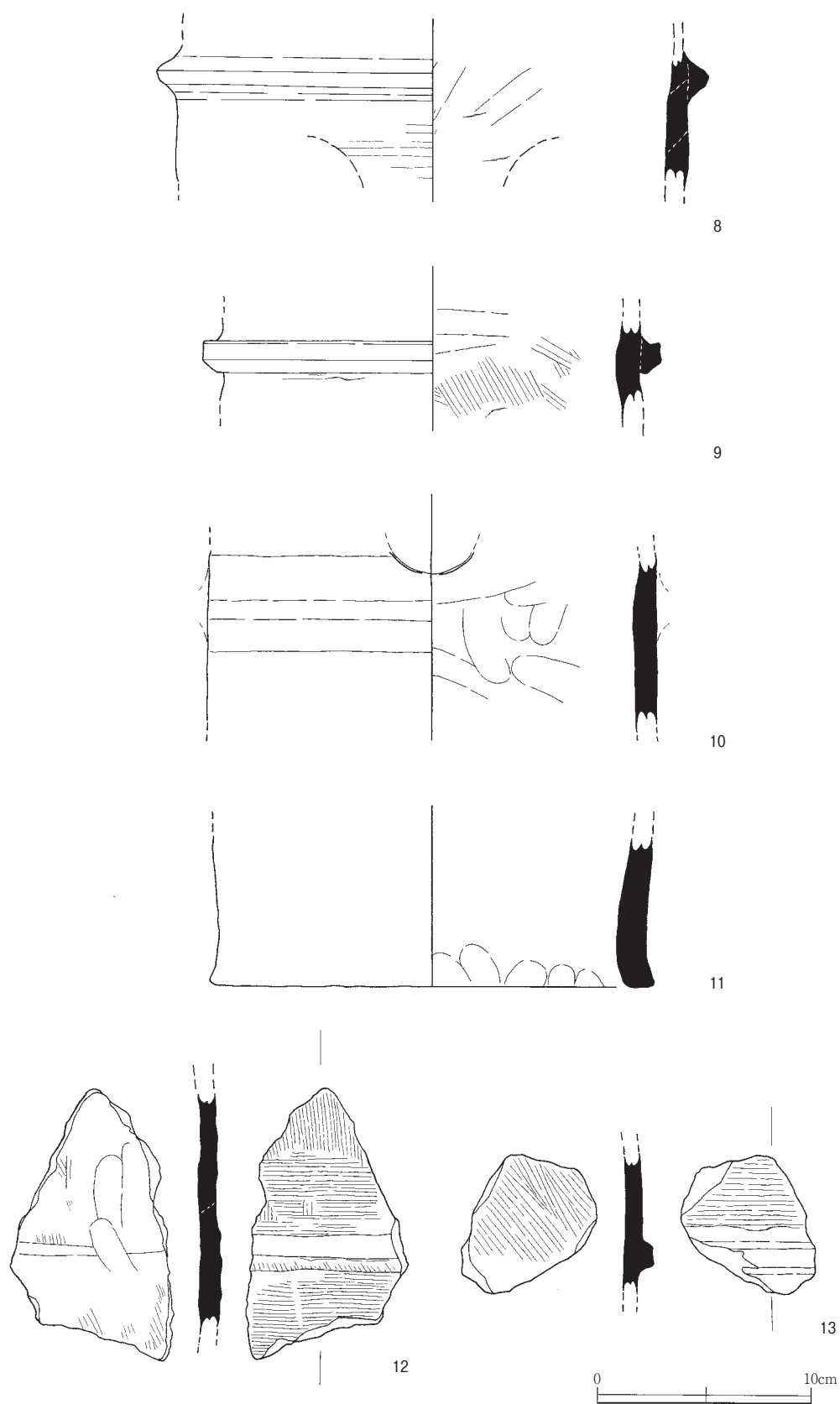


図9 円筒埴輪実測図2 1 : 3

考えられる（川西1978）。突帯の剝離部分に横方向の凹線が認められ、突帯の貼り付けや設定に関わる痕跡と考えられる（川西1978、辻川2003）。また、昨年度の出土資料に胎土や調整が共通するものがあり（『報告書Ⅰ』図8-4）、同一個体の可能性もある。13は外面の横ハケと内面の斜めハケが観察できるが、静止痕は確認できない。

朝顔形円筒埴輪 4は朝顔型円筒埴輪の頸部である。口縁部突帯は低い。内面には口縁部との接合時の目印となる刻み目が認められる。5は頸部から口縁部にかけての破片で、径26.4cmに復元される。口縁部突帯は剝離している。6は頸部から肩部にかけての破片で、頸部径は15.4cmに復元される。頸部突帯の断面形状は三角形である。

製作技法の特徴 出土した埴輪の胎土は粗いものが多く、1mm程度の砂粒を多く含む。土師質で焼成は良好であり、黒斑があることから、野焼きによって焼成されたと考えられる。突帯の断面形状はやや緩やかなM字状である。透孔は円形で、土師質であること、ハケ原体の静止が弱いB種横ハケの個体があることから、川西編年Ⅲ期の古相に位置づけられる。

昨年度の調査で出土した円筒埴輪では、突帯貼付け後の調整手法に多様性が認められた。今年度の調査で、突帯下端に2回ナデを施すもの（9）が新たに加わった。また、口縁部の形態に着目すると、外反口縁、直口縁、貼付口縁の3種類が存在することが判明した。今後の調査でさらに実態を解明したい。（柴田拓也）

3 形象埴輪（図10、図版11）

形象埴輪では蓋形埴輪のほか、器種不明のものがある。図示しなかったものも含め、蓋形埴輪が圧倒的な割合を占める。また、大半が第6調査区拡張区の周濠埋土から出土している。各個体の遺存度は低いものの、特徴的な資料が多い。以下、詳しく報告する。

蓋形埴輪 1～9は蓋形埴輪である。1は笠部上半で、軸受部と笠部下半との接点に突帯を巡らしている。軸受部との接点に巡る突帯には斜め方向の沈線が約1cmおきに入る。内外面ともナデ調整を施し、外面は丁寧に仕上げている。胎土はやや粗く、焼成は良好である。

2～4は笠部と台部の接合部である。それぞれの外面には、笠部上半と下半を区切る突帯が巡っている。2は台部・笠部とも良好に遺存しており、内外面とも丁寧なナデで仕上げている。胎土はやや粗く焼成は良好である。3は台部との接合痕跡がよく残るものの、笠部突帯の大部分が剝離している。内外面ともナデ調整を施し、外面は丁寧に仕上げている。胎土はやや粗く、焼成は良好である。4は台部・笠部とも遺存度が低い、接合痕跡が明瞭に観察できる。内外面ともナデ調整を施し、胎土はやや粗く焼成は良好である。5は笠部上半と下半を区切る突帯部である。台部との接合痕跡は見られないが、内面の傾きから直下に台部との接合部があったと考えられる。内外面ともナデ調整を施し、胎土は粗く焼成は良好である。

6～9は笠部下半である。6は縦方向と横方向にそれぞれ1条の沈線が入る。内外面ともナデ調整を施し、外面は丁寧に仕上げている。胎土はやや粗く、焼成は良好である。7は破片端部に縦方向の沈線が入るが、1条沈線かそれ以上の沈線になるかは分からない。破片中央には縦方向

の沈線になると思われる痕跡が見られるが、明瞭には残っておらず、そうでない可能性もある。内外面ともにナデ調整を施し、胎土はやや粗く焼成は良好である。8は笠縁部が遺存している。縦方向に2条、縁側の横方向に1条の沈線が入る。縦方向の2条沈線左側には一度引いた後にナデ消したと思われる沈線痕が見られる。形状は上方向に向かって、ややふくらみをもたせている。内外面ともにナデ調整を施し、外面は丁寧に仕上げている。胎土はやや密で、焼成は良好である。9も笠縁部が遺っており、1条沈線が縦方向に2本、横方向に2本入っている。縦方向の沈線は上側の横方向沈線より上には続かず、四角形状の連続区画をつくり出している。形状は上方向に向かって、やや直線的に傾斜している。内外面ともナデ調整を施し、外面は丁寧に仕上げている。胎土はやや粗く、焼成はやや良好である。

これらの蓋形埴輪は笠部上半と下半の境界に突帯がめぐっていることや、笠部下半の沈線のあり方より、小栗明彦による編年の3段階（円筒Ⅲ－2期並行期）に位置づけられる（小栗2007）。出土地点に関しては1～4、7～9が第6調査区拡張区の遺物包含層で、5・6が同区の周濠下層から出土している。周濠下層出土の5・6は墳丘内に置かれていたものが周濠内に転落したものであると思われる。いずれもくびれ部周辺から出土しており、くびれ部には一定数の蓋形埴輪が配置されていたと考えられる。この状況はくびれ部及び、それにつながる前方部の性格を考えるうえで極めて重要であり、今後の調査成果に期待したい。

不明形象埴輪 10は2条の直弧文が入り、ヒレ状に剝離している。後方に円筒形の基部が存在すると思われる。この形状から鞍形埴輪か盾形埴輪と考えられるが、現状の遺存度ではどちらか判断できない。内外面ともナデ調整を施し、外面は丁寧に仕上げている。胎土はやや密で、焼成は良好である。第6調査区拡張区の遺物包含層から出土した。

11は形象埴輪円筒部の底部である。底面が肥厚するように内面下部は内側に張り出している。内外面ともナデ調整を施すが、内面には斜め方向にヘラ状の工具痕が遺る。胎土はやや粗く、焼成は良好である。第5調査区の周濠埋土から出土した。（小堀 僚）

4 土 器（図11、図版12）

土器は調査区全体から整理箱6箱分が出土した。また、第4調査区の東西溝SD02から、ほぼ完形の土師器坏が出土した。以下、おもな遺物について報告する。

土 師 器 1は第4調査区の溝SD02から出土した坏である。口径は12.2cmで、外面は指ナデ、内面はミガキが施されている。胎土は密で、焼成は良好である。色調は内外断面ともに褐色を呈する。以上の特徴は西弘海編年の飛鳥Ⅴ期（7世紀末～8世紀初頭）に該当する（西1986）。4は甕の口縁部。復元口径は16.4cmで、口縁部は内湾している。内外面ともに刷毛目調整が施されている。胎土は密で、焼成は良好である。色調は内外断面ともに黄橙色を呈する。5は甕の口縁部。復元口径は22.6cmで、口縁部は直線気味に開き、口縁端部は丸く内面に突出する。胎土は密で、焼成は良好である。色調は外面が暗褐色、内面、断面が黄褐色を呈する。外面に煤が付着する。4は遺物包含層、5は第4調査区SD02から出土した。

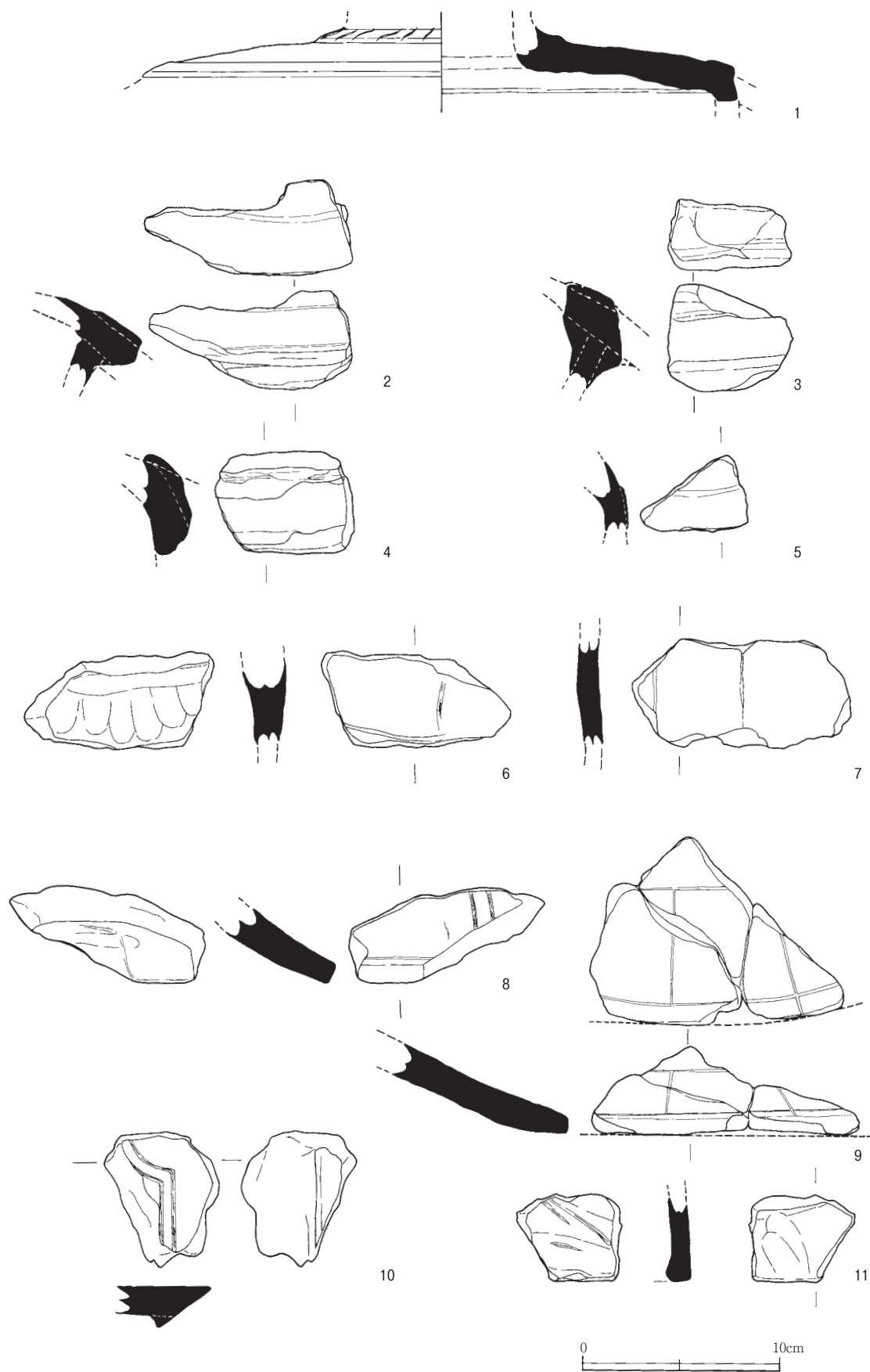


図10 形象埴輪実測図 1 : 3

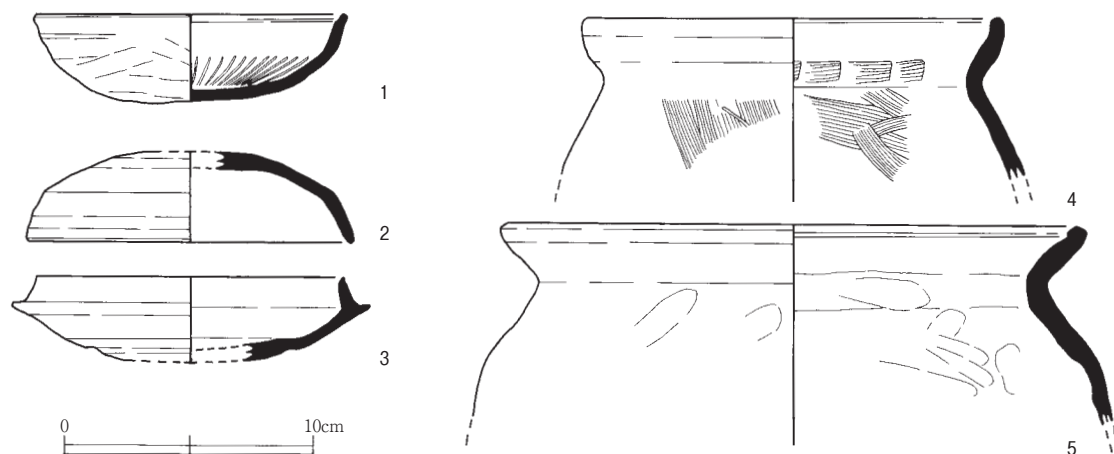


図11 土器実測図 1 : 3

須恵器 2は坏蓋である。復元口径は12.8cmで、回転ヘラケズリの範囲は広い。胎土は密で、焼成は良好である。色調は内外面とも青灰色で、断面は赤灰色を呈する。陶邑編年のTK209型式期に位置付けられる（田辺1966）。3は坏身である。復元口径は、12.2cmで、立ち上がりは低く、やや内傾する。回転ヘラケズリの範囲は広い。胎土は密で、焼成は良好。色調は内外面ともに青灰色で、断面は赤灰色を呈する。1と同様、陶邑編年のTK209型式期に位置付けられる。

以上、今回の調査で出土した主要な土器について報告した。須恵器は坏身、坏蓋ともに同時期と考えられ、SD01の埋没年代はTK209型式期（7世紀前葉頃）と推測できる。昨年度の調査で出土した須恵器と同時期で、周濠の埋没年代をさらに裏付けるものとなった。また、SD01埋没後に掘られたSD02で出土した土師器坏は、7世紀末～8世紀初頭頃に位置づけられる。甕は小片で年代の特定に至らないが、その時期に周辺の土地利用がなされたと推測できる。

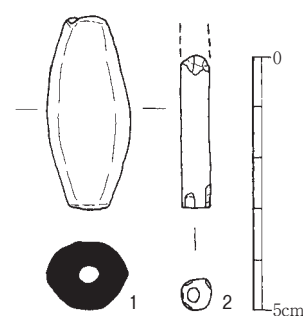
（梅木梨沙）

5 その他の遺物（図12、図版13）

第4調査区のSD01埋土から土錘（1）が1点出土した。管状土錘で、縦3.8cm、横1.6cm、穴の口径は0.4cmである。形態は和田晴吾による分類のa類に相当する（和田1982）。

管玉（2）も第4調査区SD01からの出土である。緑色凝灰岩製で、色調は薄緑色。片側端部が割れており、残存長は3.0cm、直径は0.6cmである。1954年の調査時にも碧玉製管玉が出土しており、今回の管玉も副葬品の可能性がある。

（和田健嗣）

図12 土錘・管玉実測図
2 : 3

第5章 総 括

2度の発掘調査によって、斑鳩大塚古墳の実態が次第に明らかになってきた。最後に、これまでの調査で確認した墳丘・周濠の位置関係を整理し、調査成果を総括したい（図13）。

墳形と規模 昨年度の調査では前方部北東隅と想定される位置に第2・第3調査区を設けたものの、前方部の痕跡は確認できなかった。今年度は前方部と想定される耕作地を横断するように第5・第6調査区を設定した。第5調査区では周濠が円弧状に巡らず、東へ直線的に続くことが判明した。また、第6調査区ではくびれ部付近の墳丘の一部と周濠を確認し、斑鳩大塚古墳が前方部をもつことが明らかになった。

ただし、前方部は当初の想定よりも南側で検出され、くびれ部の幅は狭い可能性がある。斑鳩大塚古墳は前方後円墳か帆立貝式古墳か、今後の調査で明らかにする必要がある。

周濠の様相 第4調査区では、昨年度の第1調査区に引き続き、墳丘の北側で周濠を確認した。周濠は西へ続くと考えられ、古墳の範囲はさらに広がる可能性が高い。

第7調査区では、墳丘の南側で周濠と考えられる溝を確認した。溝は墳丘に近い調査区北半で急に深くなる。こうした様相は他の調査区では認められず、今後、別の位置で調査区南側の周濠を確認する必要がある。

出土遺物 各調査区から多くの埴輪片が出土した。埴輪には円筒埴輪と形象埴輪があり、円筒埴輪には朝顔形埴輪が含まれる。

円筒埴輪は表面にヨコハケを施し、透孔は円形で、焼成は土師質である。これらの特徴は川西宏幸編年のⅢ期に相当する（川西1978）。円筒埴輪は刷毛目、胎土、焼成、製作技法などから、複数の系統に分けられる。また、第6調査区から蓋形埴輪の破片が多く出土し、編年上の位置づけが明らかになった。

土器では昨年度に引き続き、周濠SD01からTK209型式期の須恵器が出土した。7世紀前葉頃には周濠が埋没したことを示す。さらに、第4調査区で副葬品の可能性がある緑色凝灰岩製の管玉が出土した。

周濠埋没後の遺構として、溝や柱穴を確認した。第4調査区の溝SD02からは土師器坏が出土し、7世紀末～8世紀初頭頃に周辺の土地利用がなされることが判明した。

今後の課題 以上のように今回の調査成果を総括した。最大の成果は前方部の確認であるが、残された課題も多い。

まず、第6調査区で確認した墳丘は北側のくびれ部付近に相当する。今後は南側のくびれ部、前方部の前端部、隅部など、前方部の規模と様相を確定する必要がある。

第7調査区でも周濠と考えられる溝を確認したが、調査区全体が溝に入ったため、周濠の幅を確定するには至らなかった。墳丘南側の別の位置でも周濠を確認する必要がある。

これまでの調査で周濠の様相は解明されつつあるが、葺石の残存状況、埴輪の樹立状況、段築

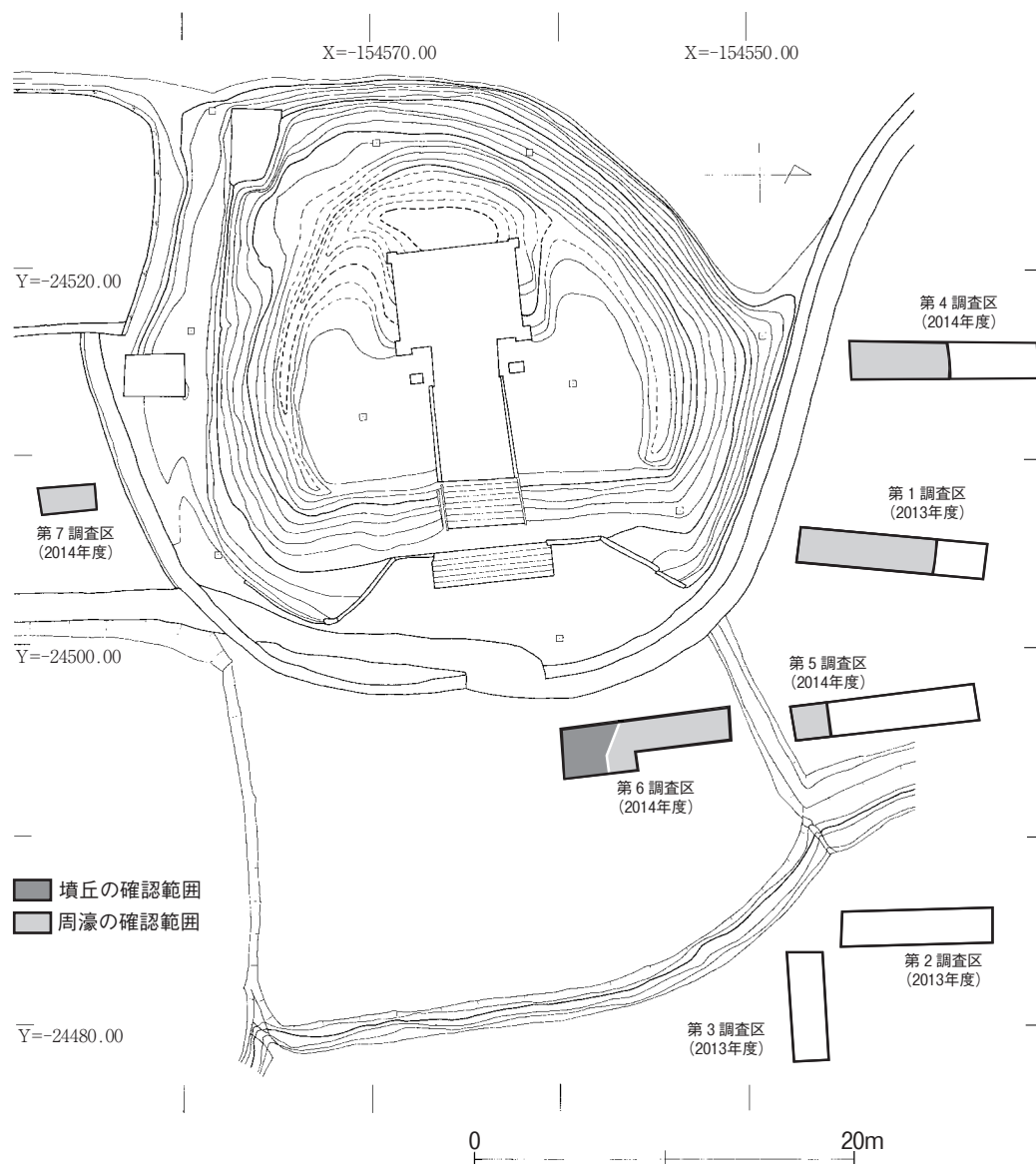


図13 調査区の位置と墳丘・周濠の確認範囲 1 : 400

成の有無など、墳丘本体の情報は依然として不足している。古墳の適切な保存と活用を図るため、今後も発掘調査を継続する必要がある。

(豊島直博)

参考文献

- 秋山日出雄編 1985『大和国古墳墓取調書』由良大和古代文化研究協会
- 荒木浩司 2007「駒塚古墳（01-1次）調査」荒木浩司編『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成13（2001）年度』斑鳩町教育委員会
- 荒木浩司 2011「駒塚古墳（02-1次）調査」平田政彦編『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成14（2002）年度』斑鳩町教育委員会
- 荒木浩司 2014「戸垣山古墳西側における立会調査出土の埴輪片について」『斑鳩文化財センター年報』第3号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 泉森 皎編 1977『竜田御坊山古墳群 付 平野塚穴山古墳』奈良県立橿原考古学研究所
- 小栗明彦 2007「蓋形埴輪編年論」犬木 努編『埴輪論考Ⅰ—円筒埴輪を読み解く—』大阪大谷大学博物館
- 勝部明生ほか編 1990『斑鳩 藤ノ木古墳 第一次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 河上邦彦・関川尚功 1977『斑鳩・仏塚古墳』斑鳩町教育委員会
- 河村萬里・高左右裕・豊島直博 2015「奈良県斑鳩町寺山古墳群測量調査報告」『文化財学報』第33集 奈良大学文学部文化財学科
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 北野耕平 1958「斑鳩大塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物抄報』第十輯 奈良県教育委員会
- 関川尚功編 1976『斑鳩町 瓦塚1号墳発掘調査概報』奈良県教育委員会
- 関川尚功 1990「三井古墳群」前園実知編『斑鳩町の古墳』斑鳩町教育委員会
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 辻川哲郎 2003「突帯－突帯間隔設定技法を中心として－」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 豊島直博編 2015『斑鳩大塚古墳発掘調査報告書Ⅰ』奈良大学文学部文化財学科
- 中井一夫 1975「斑鳩町戸垣山古墳の測量調査」『青陵』No.27 奈良県立橿原考古学研究所
- 西 弘海 1986『土器様式の成立とその背景』西弘海遺稿集刊行会
- 久野邦雄・関川尚功 1976「斑鳩町三井の古墳群について」『青陵』No.31 奈良県立橿原考古学研究所
- 平田政彦 2008『史跡藤ノ木古墳 保存整備事業報告書』斑鳩町教育委員会
- 平田政彦 2011「東福寺遺跡（調子丸古墳）（02-1次）調査」平田政彦編『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成14（2002）年度』斑鳩町教育委員会
- 平田政彦 2013「春日古墳墳丘測量調査報告」『斑鳩文化財センター年報』第2号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 前園実知雄編 1990『斑鳩町の古墳』斑鳩町教育委員会
- 前園実知雄ほか編 1995『斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 和田晴吾 1982「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考』平凡社